

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

No.	地域	伝承地	名称	呼称	文化財指定	公開日	公開場所	内容	分類	保存団体名	問合せ先	祈願
1	宇城市	不知火町亀松 宇松崎	松崎のおろろんべ	まつざきのおろ ろんべ	不知火町無形 民俗文化財昭 和50年10月 27日	不定期		<p>松崎地区は、天保11年10月、大窪(おおくぼ)、ソバ タ、五丁(ごちよう)地区の人達が移住し、生まれと伝 えられています。天保11年(1840年)亀松新地が造ら れた時、各地から入植した人々によって踊り継がれ たものです。移住の夢と希望がこの踊りに托されて います。当時は、雑草地などの荒地が多く、現在の 干拓地のようなではありませんでした。移住者は埋立 てや地ならし作業に精を出し、美田を作りあげ、その 時、明日への夢と希望を託し、踊られたのが、おろろ んべです。松崎部落の踊りであって元唄は「オロロン ヨー、オロロンヨー、オロロンガトツアンタッチャ、ドコ イカイタ。アノ山コエテ里コエテ、里ノ土産ハ何々カ、 一デコウバコ、ニデ鏡、三デサツマノ板買ウテ、板ヲ ブキョシンテ、門建テテ、門ノグルリニ杉植エテ、杉ノ 緑デ鳴ク鳥ハ、ガンカ、スイショウカ、ウノトリカ、ウノ ジャゴザラ又御所ノ鳥、ネンネンコロリヨ、ネンネシ ナ」歌詞にちなんで踊りが振付けられていますが、踊 りは、わら人形の子守役と子役の踊り子が一体とな り、子どもを背負った子守の身振りが表現されていま す。囃方は笛、太鼓、三味線で、唄い手は娘達。人 形を抱いて踊るのは青年達です。元来、干ばつの時 の宮籠り(みやごもり)の時に行われていましたが、現 在では、いろいろな催し物やお祝い事の時に出演し ながら、伝統芸能として、継承しています。【宇城市 HP/2005】 子を背負った子守の身振りをする踊りで、わら人形 が使われる。【2001】 《特色》折地のカイクイ人形(長洲町)と同様に人形を 踊り手に結びつけ、踊り手が人形におぶさったように 見せて踊る。【1991】</p>				
2	宇城市	不知火町塚原 地区向組	塚原向組神楽		不知火町無形 民俗文化財昭 和50年10月 27日	<p>10月9日 10月14 日 10月15 日 10月18 日 10月18 日 10月19 日 11月15 日</p>	<p>郡浦神社 大見神社 高良八幡宮 十五柱神社 八王神社 西岡神社 大蔵神社</p>	<p>十五社宮の氏子塚原向組によって代々伝えられて いる神楽です。明治32年(1899)に城山神社(熊本市 城山町)の社司園田光雄氏の指導で塚原向組の有 志によって始められました。一時は宇土市西岡神社 にも奉納されていました。現在は向組神楽保存会に よって子ども神楽として伝承され、近郷の神社に奉納 されています。【宇城市HP/2005】 烏帽子、直衣姿の小中学生が剣、鈴等を手に持って 奏楽に合わせて舞う。【2001】 《演目および構成》三座(1人舞)、四方拝(1人舞)、 榊(2人舞)、二剣(2人舞)、四剣(4人舞)、宝剣(1人 舞)、剣弓(2人舞)、弓矢(2人舞)、幣(2人舞)、地鎮 (1人舞)。【1991】</p>	【伝統芸 能】 神楽			

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

3	宇城市	不知火町松合上	松合雅楽		不知火町無形民俗文化財昭和50年10月27日	11月15日	松合年神社	雅楽は宮廷音楽で、允恭天皇の葬儀に参列した新羅の音楽家が伝えたとされています。平安時代に中国・朝鮮などの外来音楽に日本古来の音楽が加わり、形式も内容も大いに充実しました。雅楽は、日本の音楽の中ではもっとも体系的な理論を持ち、後世の歌謡に多くの影響を与えています。松合の雅楽は、明治9年の新風連の乱のあと、松合町救の浦(すくいのうら)地区に隠れ住んだ宮中の雅楽師が松合の人たちに伝授したのが始まりで、現在3代目、4代目で保存継承しています。楽器は、楽太鼓(がくたいこ)、鞆鼓(かっこ)、鉦鼓(しょうこ)、龍笛(りゅうてき)、鳳笙(ほうしょう)、箏(ひちりぎ)、笏拍子(しゃくびょうし)、箏(こと)を用い、奏樂します。毎年松合年神社の大祭(11月15日)のほか、藤崎宮や甲佐神社でも奏樂しています。【宇城市HP/2005】 松合神社、他寺院の祭事に奉樂している。【2001】				
4	宇城市	不知火町松合上	松合雅楽		不知火町無形民俗文化財昭和50年10月28日	11月16日	松合年神社	雅楽は宮廷音楽で、允恭天皇の葬儀に参列した新羅の音楽家が伝えたとされています。平安時代に中国・朝鮮などの外来音楽に日本古来の音楽が加わり、形式も内容も大いに充実しました。雅楽は、日本の音楽の中ではもっとも体系的な理論を持ち、後世の歌謡に多くの影響を与えています。松合の雅楽は、明治9年の新風連の乱のあと、松合町救の浦(すくいのうら)地区に隠れ住んだ宮中の雅楽師が松合の人たちに伝授したのが始まりで、現在3代目、5代目で保存継承しています。				
5	宇城市	松橋町松橋字瓶屋	栄町の獅子舞		松橋町無形民俗文化財昭和46年12月11日	10月8日 10月9日	松橋神社	栄町獅子舞は隣町の小川町から明治の初年に伝えられたといわれていますがその詳細については何もわかっていません。獅子舞はもともと中国の演舞であったものが長崎あたりを通じて渡来したもののようです。即ち獅子舞を構成する、獅子、珠、牡丹、チャルメラという組み合わせは中国特有のものだからです。栄町の獅子舞は「二人立ち、二頭立ち」の獅子頭を用いる本格派のもので、松橋神社の奉納舞楽です。まずその演舞の形式は牡丹花の下で眠っている雌雄両頭の獅子が童子の振る鈴の音に目を覚まし、その一方の手に持つ珠に戯れて舞い狂う夢幻的な世界を現出したもので、その演舞をリードする物哀しいチャルメラなどの優艶な楽の音とともに見る人をして思わずメルヘンの世界に誘うものがあります。そして、この演舞に携る人員は獅子係4人、交代を含めて8人、中国服の童子が交替を含めて2人、笛、鉦(かね)、チャルメラなどの楽器係数人、このほか満開の牡丹花を乗せ台車を引く子供や大人が10数人、世話役などを加えると数10人の大一座となります。獅子舞の演舞には演習に伴う経費やら、用具の補修その他で相当の経費を要します。もともと神前奉納という精神的なものから発したものであり、あらゆる困難を克服して郷土芸能として長く保存したいものです。【宇城市HP/2005】 松橋神社の奉納舞楽である。【2001】				

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

6	宇城市	(小川町)小川上町・中町・新町	小川阿蘇神社獅子舞	おがわあそじん じゃしまい	小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	10月15日	小川阿蘇神社	獅子舞は、小川町上町(かみまち)・中町(なかもち)・新町(しんまち)地区の青年と小川小学校の子どもたちにより演じられる勇壮な舞で、文禄元年(1592年)熊本城主加藤清正公が朝鮮半島へ出兵した際、陣中に毎晩、大虎が現れ、番兵を次々と襲ったため、一家臣が大木を切り見事な獅子を刻んで陣中に置いたところ、その晩から大虎が襲わなくなりました。清正公は大いに喜び、帰還して熊本市藤崎八幡宮で御礼大祭を開いたとき、これにあやかって魔よけに獅子舞を奉納し、その後、小川の阿蘇神社で奉納されるようになったといわれています。小川阿蘇神社の秋の大祭で奉納されるもので、太鼓、ドラ、チャルメラや服装などに中国情緒があふれ、子供の玉にじゃれ遊ぶ獅子の静また動の様子は、勇壮でまたほほえましいものがあります。【宇城市HP/2005】 小川阿蘇神社の秋の大祭に奉納するもの。【2001】				
7	宇城市	(小川町)小川出来町	宋来亀		小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	10月15日	小川阿蘇神社	小川阿蘇神社の秋の大祭で奉納されるもので、亀蛇舞は妙見神の眷族の、蛇を頭に体を亀につくり、そこで亀蛇と言われています。十数人の若者がひく亀蛇の暴れようは見ごたえがあります。【宇城市HP/2005】 小川阿蘇神社の秋の大祭に奉納するもの。【2001】				
8	宇城市	(小川町)小川寺町	小川阿蘇神社奴舞	おがわあそじん じゃ とこせい	小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	10月15日	小川阿蘇神社	大名行列の奴のしぐさを、子どもたちが演じながら町を練り歩くもので、このあどけなさに人気があります。八代の妙見の祭行事が整ったのは元禄4年の頃ですが、小川のこれらの出し物はそれを習ったものでしょう。奴舞はその掛け声から通称「とこせい」と呼ばれており、奴長(やっこちょう)と呼ばれる小川町寺町(てらまち)地区の青年を先頭に、小川小学校の1年生から6年生まで約20人と保育園児数人で大名行列を演じます。その始まりは定かではありませんが、寛政6年(1794年)の文献に獅子舞と共に登場しています。【宇城市HP/2005】 小川阿蘇神社の秋の大祭に奉納するもの。【2001】				
9	宇城市	小川町北小野	北小野おろろんべ	きたおのおろろんべ	小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	不定期		北小野に約300年前から伝わる子守唄踊りで、溜池の築造、浚渫、雨乞い等に奉納され、また、参勤交代のころ、薩摩街道(現国道3号線)の三軒家関所開きの際、相撲興業に合わせて、仮装行列としてオロロンペーが奉納されたと伝えられています。昭和初期までは青年たちが女装して踊っていましたが、戦中戦後は途絶えていました。昭和43年、旧小川町合併10周年記念行事で、民芸披露の要請があり、北小野婦人会が立ち上がりました。古老の指導を仰ぎながら、人形、着物作り、太鼓、笛、唄、踊りの練習を重ね、区長さんに旗持ちをお願いし、皆で協力し合い出演することができました。昭和50年に旧小川町の文化財に指定され、以来、北小野婦人会幹部が中心になって継承しています。【宇城市HP/2005】 昭和3年、三軒屋塘再築の際に始められたと伝えられている。【2001】				

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

10	宇城市	小川町北新田本村	臼太鼓おどり	うすだいこおどり	小川町無形民俗文化財 昭和50年9月	10月15日	河江神社	400年の伝統をもつ踊り。【2001】				
11	宇城市	小川町南小川	太鼓踊り	たいこおどり	小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	10月15日	小川阿蘇神社	小川町南小川の太鼓踊りは江戸初期が起源だとされ、長太鼓・笛にあわせて6尺棒で舞うのが特徴の雨乞い踊です。【宇城市HP/2005】 保存会が結成されており、雨乞いや村祭りなど各地で出演している。【2001】	【伝統芸能】 風流芸			
12	宇城市	小川町東海東舞鶴	棒踊り	ぼうおどり	小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	10月15日	海東阿蘇神社	小川町東海東、舞鳴地区の棒踊りは、幕末ごろ、薩摩からの伝承で、雨乞い奉納で行われてきました。「エイエイサノサッサノコイ」の掛声勇ましく、音頭と太鼓、三味線に合わせて6尺棒と太刀で打ち合い舞います。【宇城市HP/2005】 幕末頃、薩摩から伝承され雨乞い奉納で行われてき				
13	宇城市	小川町南新田	長太鼓踊り		小川町無形民俗文化財 昭和50年9月16日	不定期	河江神社	小川町南新田に伝わる笛と三味線に合わせて、大ばち、小ばちで太鼓をたたきながら勇壮・奔放に舞い踊る「雨乞い太鼓」です。【宇城市HP/2005】 元治二年頃に始まったと伝えられている雨乞い太鼓。【2001】	【伝統芸能】 風流芸			
14	宇城市	豊野町糸石	宮川の虎舞	みやがわのとらまい	豊野町無形民俗文化財 平成8年5月1日	11月23日		1800年代の中期、約170年前、異常な干ばつが続き、雨乞いに虎舞をしたのが、起こりだと言い伝えられています。戦後、中断していた虎舞を昭和50年ごろ豊野村青年団が復活し、その後、保存会が継承しています。今の虎舞は三代目(昭和8年作)と四代目(平成9年作)です。現在は後継者育成のため、宮川の子ども会に教えられています。【宇城市HP/2005】 田植え後の水不足の時に、雨乞いとして宮川地区で行われていた。【2001】				
15	宇城市	豊野町上郷	豊野村神楽(御幣舞・豊栄舞・剣舞:肥後神楽)	とよのむらかぐら	豊野町無形民俗文化財 平成8年5月1日	7月18日 11月18日	小熊野神社 白木阿蘇神社	豊野町糸石の白木(しらき)阿蘇神社に伝わる肥後神楽(かぐら)剣の舞(つるぎのまい)は、江戸時代末に、富合町の木原(きはら)六殿宮(ろくでんぐう)、城南町小木(おぎ)阿蘇神社から伝わったといわれています。右手に鈴を持ち、左手に剣を持って、太鼓、笛の音に合わせて鈴を鳴らし、剣をあやつりながら舞う勇壮な舞です。戦後、一時期途絶えていましたが、昭和47年、伝承者や神社関係者の方と力を合わせて保存会を結成し後継者の育成に努めてきました。【宇城市HP/2005】 3種類の舞が「あり、本人、参拝者の心を清める舞である。【2001】	【伝統芸能】 神楽			

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

16	宇城市	三角町戸馳本村	戸馳本村雨乞い太鼓踊り	ほんむらあまご いだいこ		田植時期	戸馳島全域	戸馳島は大きな川がなく、昔から干ばつに悩まされ、島民の水に対する思いは厚く、雨乞いの行事は高まってきました。村人が大きな太鼓を買い求めると霊照寺(れいしょうじ)八代住職密了師(みつりょうし)は二つの鬼の面を搦って村人に渡しました。そして、村人は夏になると毎年、舞い踊りました。特に雨の降らない年は島じゅうの漁船を若宮海岸に並べ、太鼓、踊り子、笛吹き、鐘打ち、船のこぎでの男衆が船に乗り、ドンドン、カンカン、ピーヒャラホと踊りながら、島を一周しました。そして、現在の三角駅通を通り、戸馳大橋まで来ると、にわか黒雲が現れ、雨が降り出し、皆、びしょぬれになりながら大喜びしたそうです。 【宇城市HP/2005】 《演目》道楽、早楽、船楽。《構成》太鼓引き20～30、太鼓打ち3、笛5、鐘2、踊り20。【1991】	【伝統芸能】 風流芸			
17	宇城市	三角町	上本庄雨乞い太鼓ナギナタ踊り			田植時期	郡浦地区	青梅小学校運動会にて小学生が披露。【2005.9.29.熊日】 《演目》道楽、早楽。《構成》大太鼓引き20、太鼓打ち4、鐘2、棒踊り手10、ナギナタ踊り手20。【1991】	【伝統芸能】 風流芸	上本庄雨乞い太鼓保存会		
18	宇城市	三角町	舟津潟切り踊り	ふなつがたきり おどり		不定	郡浦字舟津	この踊りは、今から約200～300年前、干拓工事が盛んに行われた時代に、出稼ぎに行った娘たちが初めての仕事に戸惑い、仕事のつらさに耐えながら、悲恋、干拓工事の重大さを「おざや節」という歌にして踊りで表現したものです。現在の八代市鏡町あたりの干拓工事を歌ったもので、船津に伝えられたのは、およそ100年前、船津に港が築かれたときに歌われたと言われています。それが今日まで、船津の婦人らによって伝承されています。【宇城市HP/2005】 《構成》庄屋1、監督1、鐘1、太鼓1、三味線1、唄1、潟切り1、踊り8。《特色》おざや節に合わせて干拓の作業を模して踊る。【1991】				

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

19	宇城市	松橋町	古保山神社稚児神楽	こおやまじんじゃ ちご かぐら		7月25日 10月15 日	古保山神社	古保山天満宮は、松橋町古保山にあり、学問の神様 で有名な菅原道真公を祀り、今から約500年前に大 宰府天満宮から分祀され、建立されたと言われてお り、お祭りは、毎年7月25日の夏例大祭、10月15日の 秋例大祭が行われています。稚児神楽は小学生の 児童7人で、舞子2人、太鼓2人、ジャグワリン(手拍 子)3人から構成されています。舞子は赤色の狩衣 (かりぎぬ)、袴(はかま)、白足袋(しろたび)、立烏帽子 (たてえぼし)を装束(そうたいし)、神楽鈴を右手に、大 串(おおぐし)を左手に、静と動をまじえ優美に舞い、 太鼓は、黄色の狩衣にタスキをかけ、強弱と緩急を 折り混ぜてのバチさばきで太鼓の動作に合わせま す。手拍子は茶色の狩衣を装い、直径30cmのジャ グワリンを左右に持ち、舞子の演舞に合わせて演奏 します。例大祭では、御夜と翌日の本祭で33回の神 楽を奉納し、1回の所要時間は約11分で、合わせて 約6時間を要します。毎年秋の例大祭では、地元の 当尾小学校の2年生約100人が総合学習の一環とし て、神楽奉納を見学しています。【宇城市HP/2005】 《特色》舞は1人舞で、御幣と鈴が採りもの。楽は太 鼓とジャガリン。【1991】	【伝統芸 能】 神楽		
20	宇城市	松橋町西下郷 字島	島の雨乞い銅鑼(羅) 太鼓	しまのあまごい どらたいこ		7月(田 植後) 8月1日	島区公民館 松橋町内	《構成》銅鑼引き女25人、銅鑼打ち(親打ち2人、小打 ち6人)、横笛2人、道案内2人。《特色》天保の大飢饉 から始まったと言われる。天保8年の記年の大銅鑼 (大太鼓)が残されている。【1991】	【伝統芸 能】 風流芸		
21	宇城市	松橋町	豊年餅搗き踊り	ほうねんもちつき おどり		10月15 日	豊川神社	松橋町豊年餅つき踊りは、今から約100年前、日露 戦争の時、松橋町(旧豊川村)から出征した藤本猪 之八が、戦地で食糧もない戦いで、いつ死ぬかも分 からないという時、ふるさと豊川を思い出して、戦友と 餅つきのつき手と、こどり役を支立てて、内地の正月 の餅つきを行ったのだと伝えられています。そして日 本が勝利し、内地豊川小学校で凱旋祝いに踊ったの が、土地の人たちに根付き、現在松橋町の伝統芸能 として、受け継がれています。元祖、藤本猪之八、2代 目、藤本フジエ、3代目、藤本靖子、保存会会員21名 で継続して、今では郷土芸能として実を結び、高い評 価を得ています。【宇城市HP/2005】 《構成》三味線1、太鼓1、唄1、はやし1、口上1、踊り 手15。《特色》口上が述べられた後、おざや節にあわ せて銭太鼓踊りが踊られる。次に一口にわか演じ られ、一升ますの踊り、紅白の餅搗き踊りが演じら れる。【1991】			

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

22	宇城市	松橋町	仲町の茶わん鉢	なかまちのちやわんばち				松橋高校は3年前、松橋に伝わる芸能の一つ「仲町の茶わん鉢」の復興、継承に取り組みました。明治初期から松橋神社の秋祭りに中町が奉納していた演芸の一つです。豊年を祝うお囃子(はやし)を背景に人形が皿を回します。圧巻は、最後に人形が「灯り灯籠(あかりとうろう)」に変身するところです。その時、「あととはーろー」という掛け声は、「どうぞ前をお通りください」の「とーろー」と、「灯りとーろー」の懸詞(かけことば)になっています。【宇城市HP/2005】		松橋高校 うきうきレ オクラブ		
23	宇城市	小川町南新田	河江神社神楽	ごうえじんじやかぐら		7月15日 10月14日 10月15日	河江神社	《特色》舞は稚児3人が交代で舞う。楽は笛、太鼓、ジャガリンを使用。	【伝統芸能】 神楽			
24	宇城市	小川町北小野	日吉神社神楽	ひよしじんじやかぐら		7月15日 10月14日 10月15日	日吉神社	《特色》舞は稚児による舞で、採りものは御幣と鈴。楽は太鼓と鈴と鉦。	【伝統芸能】 神楽			
25	宇城市	三角町	内瀧龍神太鼓	うちがたりゅうじんたいこ				内瀧龍神太鼓は、笛、鐘、太鼓、鬼舞、踊り子で構成されており、「道楽(みちがけ)」、「早楽(はやがけ)」の2通りのたたき方があります。音に合わせて鬼は舞い、踊り子は花菜配(はなさいはい)を指先で持ち、巧みに回し、天に向かって振り上げ、「ヨイサッサー、ヨイサッサー」と調子よく舞い進みます。「よい雨よ、サッサーと触れ」という意味を持ち、天から雨を迎える動作で、天の神様をお願いするのが雨乞い太鼓です。内瀧に伝わる鬼の面は、戸馳の島が阿蘇家の領地であったころ、稲が実り、秋の収穫になると、どこからともなく船に乗った盗賊が襲ってきて、収穫物を奪っていきました。村民の嘆きを聞かれた阿蘇氏の代官は、能に使う鬼の面を渡して、盗賊を追い払えと教えてくれたのです。鬼の出現に恐れをなして、それ以後は島を襲うことはなくなったと伝えられています。その後、干ばつの時、雨乞い太鼓に鬼舞が出るようになりました。【宇城市HP/2005】				
26	宇城市	三角町	下本庄雨乞い踊り	しもほんじょうあまごいおどり				江戸後期から明治、大正期にかけて、各地区において雨乞い踊りが大変流行し、当時、下本庄地区は比較的裕福な農家が多く、自然と雨乞い踊りにも熱が入り、盛んに行われていました。その熱が高じて、村の有志が安来節(やすぎぶし)の本場まで出向いて踊りを習い、それを道中踊り風にアレンジして、区民そろって踊ったと伝えられています。戦中戦後の混乱で太鼓もなくなり、踊りも継承する者がなくなってしまう、次第に廃れていきましたが、これを惜しむ区民で、平成9年に郡浦地区町民館の建設を機に、日本舞踊の先生に依頼して、安来節を音頭風に手直しし、新雨乞い踊りを復活させました。しかし会員の高齢化等の問題で後継者の育成が間に合わず、やむなくそのとき一緒に作った村おこし音頭を踊っています。【宇城市HP/2005】	【伝統芸能】 風流芸	下本庄雨 乞い踊り 保存会		

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

27	宇城市	三角町	三番叟	さんばそう				三番叟は、大正天皇の即位の祝いに踊られたときから始まりました。その創始者、岡村亀代(おかむらきよ)は明治8年、熊本市高麗門(こうらいもん)裏町に生まれ、明治35年、三角町波多浦(はたうら)の岡村家に嫁がれ、大正天皇の即位の祝いのときに踊りを伝授されました。それ以来、町の祝事や地区の氏神様の祭りに踊り伝え、最近では、三角東小学校の100年祭などの祭りで、演芸の一番始めにお払いの踊りとして出演しています。【宇城市HP/2005】				
28	宇城市	不知火町	永尾ちょぼくれ	えいのうちよぼくれ				江戸時代の街頭芸で、約250年前の宝暦年間に、大阪で始めて行われて「ちょんがれ」と呼ばれ、江戸に移って「ちょぼくれ」となり、手に鈴や楊枝を持ち、早口唄や神おろし歌をとなえて、門口などで、踊られました。その節の調子に、邦楽と舞踏がついて、約200年前の文化、文政のころ流行しました。小さな木魚を叩きながら、阿保陀羅経などに節をつけ、早口に謡う一種の俗謡で、江戸時代に流行し、町民の幕政批判がこめられていたものと思われます。【宇城市HP/2005】				
29	宇城市	松橋町	東松崎底井樋太鼓踊り	ひがしまつざき そこいびたいこ おどり				東松崎は天保12年(1841年)の冬、新田開発により50軒の農家が入植したと言われていいます。干ばつに泣かされた村民を救うため、弱冠21歳の松田喜七(まつだきしち)庄屋が、猫の迫溜池(ねこのさこためいけ)の水を持ってくるために、寝食を忘れ、財産を投げ打って奔走し、大野川の底にサイホン式の水道管を設置することを決断しました。最初は、水道管を木材で作ったため、潮水が入り込み、失敗の連続でしたが、その後、轟泉水奉行(とどろきせんすいぶぎょう)の花村信介(はなむらしんすけ)から、門外不出の漆喰法をやっとの思いで伝授され、石材に漆喰を塗り、不知火海から押し寄せる潮流と闘いながらの難工事を克服し、嘉永5年(1852年)7月27日に見事完成しました。喜七翁の偉業は、現在もお無言のままひっそりと流れており、黄金色に糴る百丁歩(ひやくちょうぶ)の稲穂は、まさに喜七翁の魂そのものではないでしょうか。【宇城市HP/2005】	【伝統芸能】 風流芸	東松崎底井樋太鼓踊り保存会		
30	宇城市	三角町	郡浦神社例大祭			10月	郡浦神社	小学生らによる神輿が神社から旧郡浦小までを練り歩いた後、境内で子どもたちが乗馬体験。参道では流鏝馬、赤ちゃんの土俵入りや子ども相撲、うなぎのつかみ取りも行われる。【2006.10.16.熊日】		三宮馬追会		

公益財団法人熊本県立劇場 伝承芸能調査事業 市町村データベース(宇城市)

31	宇城市	不知火町	海の火まつり	うみのひまつり		9月21日	永尾神社～天の平農村広場	夕闇の中、住民らによるたいまつ行列が永尾神社から天の平広場まで練り歩く。千数百年前、九州巡幸中の景行天皇が、暗闇の海上で不思議な火に導かれ、無事海岸にたどりついたという故事が祭りの起こり。以来、この火を不知火と呼び、町名の由来となった。祭りは旧暦の八朔の日に合わせて毎年行われている。景行天皇に扮した市長と女性を乗せた巡幸船が永尾神社の海中鳥居近くに姿を現すと、海岸から火の矢が放たれ、海上に設けたかがり火に点火。夕闇迫る海辺が照らされる中、古代装束姿の約50人が船を出迎え、祭り主会場の農村広場までたいまつをにかけて導き、練り歩く。【2006.9.22.熊日】		宇城市不知火支所などで行われる実行委員会		
32	宇城市	不知火町	竜燈太鼓	りゅうとうだいこ		不知火中文化祭	不知火中学校	地元の創作太鼓。肥後太鼓、炎(ひ)などの演目がある。十年ほどまえから不知火中学の文化祭で中学生が披露。音楽の選択授業の一つとして学習できる。【2006.10.22.熊日】		竜燈太鼓保存会		